

大卒で非正規雇用に従事する女性 — 15年間、消極的に生きる —

梶 島 真沙美*

A woman who has graduated from college and is employed in non-regular employment:
live a passive life for 15 years

Masami Wakushima

1. 主題の設定

(1) 非正規雇用の実態

2023年8月の就業者数は6773万人、雇用者数は6088万人であり、前年同月よりも就業者数は22万人、雇用者数は44万人増加している。男女別就業者数では、男性は3707万人、女性は3066万人である。正規雇用に従事する者は3637万人、非正規雇用に従事する者は2114万人であり、昨年よりも非正規雇用に従事する者は7万人減少している。役員を除く非正規雇用に従事する者の割合は36.8%である。(総務省統計局⁽¹⁾)

男性は682万人から681万人、女性は1439万人から1433万人となっており、男女とも非正規雇用に従事する者は昨年よりも減少傾向にある。だが、月別にみると、2023年8月は男性の非正規雇用に従事する者は675万人、2023年7月は698万人である。2023年8月の女性の非正規雇用に従事する者は1434万人、2023年7月は1450万人である。月ごとに数万人単位で雇用形態に変動があるため、一概に減少したとは言い難いだろう。(総務省統計局⁽²⁾)

次いで年収においては、正規雇用に従事する男性は431.0万円、非正規雇用に従事する男性は283.6万円である。正規雇用に従事する女性は310.4万円、非正規雇用に従事する女性の年収は203.6万円である。年収においては、正規雇用／非正規雇用による格差だけではなく、男女間においても格差が著しい。(厚生労働省⁽³⁾)

また、男女の雇用人数の増減にはコロナ禍も影響しているだろう。永濱(2022)はコロナ禍でサービス業や流通業などの業種では雇用が減っているが、情報通信業では前年比でプラス10万人、不動産物品賃貸業では前年比7万人と大幅に男性の雇用を押し上げている。一方で、女性の雇用はそこまで増えていないと述べる。

非正規雇用に従事する割合、さらには年収面においても、非正規雇用に従事する女性がより一層厳しい状況におかれている。

(2) 筆者の営む学習塾における非正規雇用の実態

筆者は横浜市泉区で小中学生向けの学習塾(以下当塾と記す)を営み始め、現在で11年目になる。当塾でも大学生を中心に従業員を非正規で雇用している。求人広告を掲載した際には、週2～3日で各2～3時間という短時間労働であるにも関わらず、40代や50代からの応募が後を絶たない。新卒時から長らく非正規雇用に従事してきた履歴書を拝見する限り、様々な事情を抱えているだろうと推察される場合も多くある。福祉による支援を受ける等、一度自身の体制を整え直すことが必要と思しき30代～60代の彼ら／彼女らにも、当塾を起業してからの10年間で数多く出会っている。中には経済的な事由に限らない「生きづらさ」を当時20代の筆者に漏らした者も数名いた。

だが、彼ら／彼女らの中には、本来であれば、公的な支援対象者であるにも関わらず、公助ではなく、自助を優先する者も多い。また、自らの現実を

* 日本女子大学大学院2019年3月修了、桜光塾代表

的確に第三者に伝えることは困難を伴うため、支援に至るまでに多大な時間を要してしまうこともあるだろう。その点について考察するために、彼ら／彼女らがどうして非正規雇用から抜け出せないのか、どうして長らく非正規雇用に従事し続けているのかを考える必要があるだろう。

本論文では、非正規雇用に約15年間従事する30代後半の女性1名⁽⁴⁾の事例を検討し、上記の問いに少しでも接近することとする。非正規雇用に従事する者に見られる傾向を分析することにより、非正規雇用の当事者がおかれている／おかれていた状況から、非正規雇用に従事する彼ら／彼女らが、①どのような困難を抱えており、②なぜ社会から零れ落ち、③どのような教育を施すことで、非正規雇用に従事する者を抑制できるのか。その3点について、考察することを目標とする。

2. 研究方法

主題を研究するために、以下の方法を用いる。

考察の中心となるデータは、大学卒業後、約15年間非正規雇用に従事する30代後半の女性1名（以下Hと記す）に対する聞き取り調査から得られたものである。インタビューの詳細は以下の通りである。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後であったため、対面でのインタビューを中心に行った。インタビューはインフォーマルな形式で行い、

会話の内容は録音を行い、都度相違がないか確認を行った。また、Hの仕事の繁忙期には、対面でのインタビューが難しかったため、オンラインでメッセージングを使用し、議事録を残す形式⁽⁵⁾でインタビューを行った。インタビューを行ったインフォーマントの概要は、表1の通りである。

3. 非正規雇用に従事する女性の生活

非正規雇用に従事する女性はどのような問題に日々直面しているのだろうか。その点について、Hの事例を詳細に分析することで、考察していきたい。なお、対象者には、論文に記述された内容の掲載について許可をいただいた。

(1) Hの大学時代、筆者と出会った当時のH

Hは筆者の大学時代の友人の一人である。Hは東海地方の海沿いで生まれ育ち、姉と両親、祖母と暮らしていた。大学への入学を機に18歳で上京し、一人暮らしを始めた。Hは大学卒業に必要な単位を3年時までに20単位ほど取得できず、4年時にも大学へ通っていた。

だが、それだけではなく、「(負い目としてではなく)両親から学費を出してもらったのだから聞きたい授業はとろう、学費がもったいない」との気持ちから、他学部や他学科の科目であっても興味のある科目は参加し、レポートを提出していた。勉学以外では、文化祭実行委員会に所属し、積極的に文化祭

表1 インタビュー調査の概要

名前 性別 勤務歴	インタビュー調査日時	時間	内容
H 女性 15年	2023年5月28日(日) 16時半～19時半	180分	現在のHの生活について、社会関係資本
	2023年7月9日(日) 16時～18時	120分	学生時代(高校・大学)、現在の仕事について
	2023年7月15日(土) 12時25分～15時30分	オンライン上のメッセージでのやりとり	学生時代、現在の仕事、私生活について、インタビュー内容の確認。
	2023年7月30日(日) 16時～18時50分	オンライン上のメッセージでのやりとり	既卒前後で変わったこと、インタビュー内容の確認。

の運営に2年間携わった。

卒業後は学芸員を志望していた。Hは学芸員になるために、大学院に進学したほうが採用されやすいと考えた。大学院で研究したいという願望は薄かったが、大学院へ進学をしようかとも考えるようになった。そして、大学4年時に皆が就職活動をした時期は、単に「(美術関係以外の)一般企業に興味を持ってなかったため」就職活動はしなかった。

しかし、大学教員から、東京大学の大学院を修了していても学芸員になるまでには数年かかった話などを授業で見聞きしていたため、(学芸員になることが)狭き門であることは知っていた。それでも興味を持っていない一般企業ではなく、美術の仕事がしたいと思い、学芸員や美術関係の仕事に就けることを模索していた。

(2) Hの非正規雇用の遍歴

既卒後は学芸員として美術に関わる仕事に就くべく、美術を独学で学び続けた。しかし、漠然と計画していた大学院へは進学できなかった。学芸員の採用試験も継続的には受験していないものの、募集があれば26歳まで受験した。また、学芸員に限らず、美術館での求人があった際は、ボランティア以外であれば、短期間や非正規雇用であっても、できる限り応募した。

しかし、非正規雇用以外での採用は訪れなかった。色々と内情を知る中で、H自身にはできない仕事だろうと感じ、学芸員の採用試験からは徐々に足が遠のいていった。加えて、地方の学芸員の募集は公務員としての採用になるため、(Hにとっては)倍率が高かった。さらに、ギャラリーでの求人も二か国語を話せることが応募時に必要条件であり、Hの(語学の)能力的に無理であり、採用試験を受けることはできるが、採用されないと感じた。

そして、採用試験に関わらず、学芸員は「普通に正社員として勤務できる人」がやる仕事だとも思った。H自身、幼少期から「(H自身が)普通ではないのかな」と感じており、このころに限らず、「普通じゃないということ」は「普通に(就活をして正社員として)働くことには向かない」のではないかと考えていた。就活時や仕事のみならず、「生きること」に対しても同様の「普通」に対する違和感がややあった。そして、「就活するのが普通だったの

かなって、自分は普通ができないんだって自分を責めた時期」もあったという。

だが、Hは美術以外の仕事に関心が持てずにおり、大学のとき同様に正規雇用されたいと思う一般企業も見つからなかった。派遣会社を通じて様々な非正規雇用を経験し、美術関係の展覧会での仕事(一つの展覧会が約3か月程度で終了するため、長期での仕事ではない)、飲食店等で働いた。

26歳のときまでは学芸員を目指しつつ、日々の生活費を稼ぐために派遣会社を通じて複数の仕事を掛け持ちしていた。当時は、美術館にもよく足を運んでいた。現在は学芸員として美術館に就職することは諦めているものの、美術やアートに携わりたい気持ちは変わっていない。学芸員の資格や美術の知識をどこかで役立てたいと今でも思っているという。

現在は直接雇用で、倉庫内での軽作業(ピッキングや荷物運び等)に従事している。雇用先にフルタイムでの勤務希望をしているが、なかなか希望する勤務時間にはならない。繁忙期はフルタイムでの勤務になることも少なくないが、繁忙期以外でフルタイムの勤務になることは多くない。

また、派遣や直接雇用として働く中で、職場を何度変えても、上司や同僚がハラスメントを行っている場面に遭遇した。繊細な性格のHは自身が被害にあわずとも、ハラスメントを受けている同僚らの気持ちを過敏に感じ取ってしまう。結果として、体調を崩すまではいかないものの、職場でのハラスメントを垣間見ることによって、ストレスを抱えてしまうことは少なくないという。

さらに、それらとは別に何が原因かは明確ではないものの、一時期体調を崩して思うように働けなくなった時期もあった。そのため、体調不良で一度内科を受診したが、医者からは体調不良は精神的なものだと告げられ、血液検査をした程度で(体調が以前の状態に戻るような治療はなされず)終わってしまった。それ以降、説明が苦手なHにとって病院のハードル⁽⁶⁾は高くなった。現在のHは、明確な症状がわかるとき以外、病院へ行かなくなってしまった。Hの体調が完全に戻ることはいまだにない。

近い将来(約半年~1年以内程度)、交際相手B⁽⁷⁾(以下Bと記す)の転勤にあわせ、首都圏近郊に引越しの予定である。Hとしては首都圏近郊に特段こだわりがあるわけではなく、もっと地方にも行き

たかったとも思っている。Bにあわせて引っ越した後、引っ越し先で観光業（20代後半から、アートをを用いた地方の活性化に興味がある）や第一次産業に関心を寄せている。だが、26歳以降の就きたい職業などは常に変化しており、今後の人生設計については、H自身の中で未だに模索している部分が大きい。

（3）Hの現在の私生活と生育した環境

Hは首都圏の賃貸マンションにて、Hより数歳年下の30代前半のBと同棲している。Bとの会話は最低限⁽⁸⁾だが、仕事が多忙であるBに代わり、Hが家事のほぼすべてを行っている。同棲生活の基盤となる費用は、Bが賃貸マンションの家賃10万円（管理費込）、食費や光熱費などの生活費として3万円を出している。

Bは、大学入学時に中部地方から上京し、首都圏の国立大学を5年かけて卒業した。現在は、首都圏の飲食店で働いている。毎月の収入は安定しているが、大学進学時の奨学金の返済がまだ数年残っている。月に13万円以上の稼ぎはあるが、13万円以上の金額はHに渡しておらず、H自身もBから13万円以上を受け取ることに固執していない。だが、家賃を除いた3万円で、光熱費や食費といった生活費すべてを賄うことは難しいため、不足分はHが非正規雇用で得た収入から補填している。

Bの13万円以外の支出は、B名義のクレジットカードの明細を見ても特段大きな出費がなく、大学時代に借りた奨学金以外には時々高い買い物をする程度であり、Bが何に給与を費やしているのかわからない。Bはお金を貯めることに興味がなく、貯金ができていないことはHも知っている。将来、誰かと一緒に暮らすなら「Bが楽だから一緒にいたい」と述べ、Hは（将来へのBの）お金が貯まらないことに不満はある。だがしかし、Bの貯金（お金）であるため、貯まらないことに干渉もしたく、関心もあるが、「他人のお金に口出しをするのはおかしいよね」という感じもある。そのため、Bに対して、必要に以上に口出ししないように心がけている。

交際期間や同棲している期間を垣間見る限りは「事実婚」のような状態であり、お互いの両親にも、数年前に交際相手として互いを紹介済みでもある。

Bから暴力をふるわれるわけではなく、怒鳴られること、罵り合うような喧嘩をすることも一切ないため、Hは現在の生活に対して、日々「安定」していると感じている。

しかし、Bは事実婚や入籍に積極的ではない。Hは「戸籍を（中部）地方のZ県まで取りに行くことを、（Bが）面倒がりそうだなって（Bに対して）思ってるんだよね。Z県まで遠いし、交通費高いし。Bだけなら（Bの両親から）交通費を払ってもらえるかもしれない（払ってもらえるという確証はない）けれど。」と述べる。筆者が「私が結婚したときも（夫の本籍地である）東海地方まで（戸籍を）取りに行くのは、仕事もあって大変だったから、戸籍は彼（筆者の夫）の両親に取り寄せてもらったよ。（Bの）親なら（戸籍の取り寄せは代理で）できるし、郵送してもらってもできるよ。」と話す。するとHは「彼女（H自身が戸籍を地方）から取り寄せてって（Bの両親に）連絡するってこと？そんなことしたら、B（が）嫌でしょ。」と述べる。

Bとの会話は前述したように最低限であるが、年に数回休みがあったときには、泊まりでキャンプ⁽⁹⁾に行くこともある。しかしながら、Bは飲食業界で働くがゆえに、Bの仕事が急に入ってしまうこともある。そのため、直前で出かける予定がキャンセルになってしまうこともあるという。

筆者と共通の友人A⁽¹⁰⁾（Hとの共通の友人、以下Aと記す）とHでグループになっているSNSがあり、多いときは週に数回やりとりをしている。筆者とAがHに対して、Bと別れることや他の男性と食事に行くこと、見合い、Bと事実婚や婚姻することで、扶養に入るとBもHも税制上優遇されることなどをSNSのメッセージで提案してみるも、「心配してくれてありがとう！たぶん彼も税金のことは知ってると思うだろうけど、結婚もそうだけど、それで（結婚）しないことを選んでるから私の意志だけではどうしようもないんだよね」と返答がある。今のBとの生活に別段大きな不満はなく、「幸せ」であると繰り返し述べる。そして、「真沙美（筆者）とAの幸せの基準が高いから、心配してくれるだけで、心配してくれなくて大丈夫だよ。私は今じゅうぶんに幸せだよ。」と即答される。

なお、両親は、Hに「戻ってきて一緒に住むこと」も提案してくれているが、Hはあまり気乗りし

ないという。なぜなら、Hの実家である海沿いの戸建てには、両親に加え、姉夫婦、姉夫婦の子ども4人（中学生2人、小学生1人、幼稚園児1人）も同居しており、既に手狭だからである。さらに中学生の甥は通院が必要であるがゆえ、実姉は働き出たいものの、常に子どもたちから、目が離せないような状態である。

(4) Hの社会関係資本

Hの社会関係資本は、小中学校や高校時代の友人とHの交際相手を中心に構成されている。大学時代には、Hの友人は少なくなかったものの、大学の同じ学部や同じ学科の友人とは卒業と同時に段々と疎遠になってしまった。

Hには、A以外にも筆者と共通の友人や先輩がいた。しかし、彼ら／彼女らの多くは、30代になるにつれ、結婚や出産、住宅購入やペットを飼うといった個々のライフプランの変化が著しかった。また未婚・既婚を問わず、仕事でのキャリアアップや、キャリアアップとしての転職を着実に重ねていった。結果として、仕事や子ども／夫婦、はたまた仕事上必要となる資格試験やペットという共通の話題が乏しいHと大学時代の友人は徐々に写真を投稿するSNS以外での接点が薄れてしまった。

だが、これはHの周辺に限ったことではなく、20代後半～30代の女性において、結婚や出産、住宅購入、転職といったライフプランが激変する中のごく自然な流れであるともいえるだろう。

表2に、後述するインタビューにも登場するH

の社会関係資本をまとめる。Hとは、20代後半に筆者とAと3人で会って以来、ほぼオンラインのみで接している状況であった。コロナ禍では、オンライン飲み会やお茶会をしようという提案があがったときも、Hは仕事で予定が合わず、AとHはオンラインであっても対面できていない状況が現在まで続いている。現在のHにとっては、筆者もAもやや疎遠になりつつある友人の一人であり、強固な社会関係資本とは言い難い。40代の同僚と交際相手のBが、現在のHにとっての一番身近な社会関係資本となっている。

はじめに、小学校時代の友人C（以下、Cと記す）との関係性が垣間見えるインタビューをみてみよう。

風俗の友だち(C)と4年に1度、旅行に行くんだよね。(行きたくないという否定ではなく)義務みたいになってて。
彼女(C)は(新幹線の)グリーン車で。私は自由席(各自で好きな席に座って、同じ新幹線だけれど、現地で合流)みたいな。(経済的な面だけではなく、Cは何としても座りたいけれど、Hは自由席で座れなくても気にしない)で、旅先でも私の経済状況に合わせて、食事もしてくれる。だから割り勘で。お互いに気を使わないようにだんだんと(自然とそうなった)。
2023年7月10日(日)

高校時代の友人DEF（以下、DEFと記す）とも、

表2 Hの社会関係資本

氏名	最終学歴	勤務形態	家族構成	Hと知り合った経緯
C	専門学校卒業	風俗（非正規雇用）	独身、Cの交際相手、Cの実母	小学校時代
D	大学卒業	業種不明（正規雇用）	夫、幼児2人	高校時代
E	短大卒業	保育士（正規雇用）	夫、幼児1人	高校時代
F	専門学校中退	業種不明（正規雇用）	独身	高校時代
A ⁽¹¹⁾	大学卒業	不動産事業（正規雇用を経て、現在は非正規雇用）	夫、乳幼児2人	大学時代
筆者	大学院修士課程修了	教育事業（代表）	夫	大学時代
G	短大か専門学校卒業	現在のHと同じ職場（非正規雇用）	夫、子2人	Hの現在の職場の同僚

(2023年7月9日(日)インタビューより)

数か月前から予定を合わせて、家族ぐるみ（Bは仕事の休みが合わずに不参加）で定期的に会う間柄である。だが、DEFには子どももいるので、予定を立てるには数か月先になるという。

Hが意識しているかは不明であるが、CとはDEF以上に親密であり、気疲れすることなく居られる間柄であることが読み取れる。旅行に対して、「義務」という表現がインタビュー時になされていた。しかし、それは決して否定的なニュアンスではなく、「向こうは気を遣わなくていい家族みたいな関係だって言うてはくれている」というような、気を揉む必要がない関係である。そのようなふんわりとした緩やかな距離感の友人は、構築しようと思って、構築できるものではないだろう。だからこそ、細く長く繋がりが続けていられることが伺える。

（5）Hの現在の勤務状況

Hは現在、倉庫内で軽作業に従事している。13時～18時までの勤務であり、繁忙期以外の稼働時間数が少ない。直接雇用であるが、シフトは勤務希望日の前日に知らされるシステム⁽¹²⁾になっており、休暇の申請はしやすいものの、月に何日間働くことができるのかは未定な状況である。そのため、繁忙期以外の収入は常に不安定な状態が続いている。

20代のHには、気力や体力があったため、複数の仕事を掛け持ちしていた。現在も貯金をするために勤務時間を増やすことや副業も考えてはみたものの、Hはマルチタスクのような仕事が不得手である。過去に派遣会社を通じて紹介されたコールセンターでの業務では給与面での待遇はよかったものの、契約を更新せずに辞めた経緯がある。特に30代後半からは疲れてしまうようになり、体力面でも精神面でも無理をしないよう心掛けている。ゆえに、以前のように仕事を掛け持ちすることはしていない。

（6）Hについて気になった背景

筆者は、大学時代にHと知り合った。数多くいる友人の一人であり、筆者が当時のHを心配することは一切なかった。他の友人同様、一緒にご飯を食べたり、AとHの3人で出かけたりしていた。

だが、約7年ぶりに再会した際に、筆者が今現在親交のある同世代の友人とは、大幅に異なる雰囲気⁽¹³⁾

があった。また、お酒を飲みながらの話題は専らHの不運な話（好きだったお店がどんどん閉店する、旅先の悪天候で交通機関が止まる話題等）が多く、全てにおいて気がかりであった。

はじめに、筆者が少しずつでも貯金をするように諭した際、Hから返ってきた言葉をみていきたい。

大学の時は働いても、同年代とか若い人ばかりだったから楽しかった。でも社会人になると、社会にもまれる？っていうのかな。大学の時が一番楽しかった。

（真顔になり、筆者の目をしっかりと見つめて）15年、本気で笑ったことはないの。大学時代が一番楽しかったなあ。明日、事故とか病気とかで死ぬかもしれないのに、（貯金はあったほうがいいけれど）貯金する意味ってある？

（筆者が貯金について心配するとHは）60代でも今の倉庫（現在のHの職場）で働いている人いるから、健康であればどうにかなるかなって。

2023年7月10日（日）

Hは大学時代からアルバイトをしており、卒業後に急にアルバイトを始めたわけではない。しかし、大学在学中と卒業後では、同じ非正規雇用であっても、周囲（雇用先等）からの対応は学生時代と異なりがあったという。

加えて、「15年、本気で笑ったことはないの。」という文面からは、卒業後の社会人として過ごした15年が、仕事面だけではなく、いかにしんどく辛いものであったのかが浮かび上がるようである。

その一方で、貯金に真剣に取り組む姿勢はない。また、現在の職場の60代のようにも働くことはできるので、Hは（仮に現在のような非正規雇用の状態が続いても）ホームレスになることや餓死をすることはないだろうとも考えている。非正規雇用で働くことによる経済的な不安定さについては実感しているものの、正規雇用されれば安心という考えではない。

Hが最低時給で働いていると伺っていたため、筆者もHが毎月定額の貯金を継続することは難しいと考えた。そこで、「今日（筆者が食事代を）だしたら、その分貯金してくれたりする？」と筆者が聞くと、Hは「しないと思う。」と即答した。

「明日、事故とか病気とかで死ぬかもしれない」という言葉から、数年後や老後を想像することは会話の中であってもできていないことがわかる。「明日が来ないかもしれないのに」という考えが大きく、自分は今死ぬかもしれないと定期的に考えてもいると述べていた。死について考えながらも、日々を「消極的」に生きている。おそらく、現在の職場環境にいる、60代の非正規雇用で働く同僚の影響も少なくはないことが推察される。

次に、Hが筆者とH自身を比較している内容をみていこう。

真沙美（筆者）はその日暮らしができないけれど、私（H）はその日暮らができるから。（今の生活に大きな問題はない）。真沙美（筆者）はいつでも助けてもらえるよね。（大学院とか筆者の実家が何か問題を起こしたとき）困っているときや頑張ろうってするときに、誰か（教員や先輩、友人、夫、大学時代はその時々との交際相手が）助けてくれる流れになる。（筆者が）頑張ってるから、頑張ってる人が集まるんだろうけど。

2023年5月28日（日）

筆者自身、大学時代に利子を含めて約450万円の奨学金を借りた。また、仕送りなしでの一人暮らしであったため、教科書代等の学費以外にも、筆者自身で光熱費や食費といった生活費を工面する必要があった。意図していなかった大学内での実習費の支払いがあった際には、急いでアルバイト先に連絡し、事情を話してシフトを増やしてもらうことも度々あった。大学のゼミの指導教官や複数のアルバイト先、当時の交際相手や友人等、困難な状況を察してくださった多くの助けのもと、卒業を迎えた。その後の雇用先の配慮（正社員でありながら副業の許可をしてくれる、残業を増やしてくれる等）も多々あり、奨学金も早期に完済することができた。

Hは「その日暮らができるから」と述べつつも、同時期に大学時代を過ごしていた筆者のひっ迫していた状況を知っているからこそ、既卒後もどうして（Hではなく筆者には）困難に陥ったとき、いつも手を差し出す者が現れるのだろうかという、純粋な疑問が投げかけられているように感じた。経済的に困難であった点では、過去の筆者とHは同様で

ある。だがしかし、Hに対して差し出される手の数はあまりにも少ない。

次いで、Hが誰かにありのままを認めてほしいと切実に願う様子を見てみよう。

大学卒業して思ったのは、（自分の人生が）思うようにならない（ことが多いということ）。自分という人間を（論文のような一つの能力が認められるのではなく、丸ごと人格や外見も含めて、社会全部に）受け入れてほしい。変じゃないと思われたい。正社員として働く人に「普通じゃない」って（変だということを何度も）言われ続けたから。だから、（変でも普通ではなくても受け入れてもらえそうな）アーティストとか政治家になりたいって、この前（筆者と会ったときに）言ったんだと思う。

ていうか、この前、（筆者とHで飲んだ時に筆者は、強めのワインを飲んでしまい、性格がいつもより明るくなるほど酔った）酔っぱらうの楽しくなかった？ 癖にならない？（とHが話すので、筆者が何日お酒を飲んでいないか伝える。）

お酒を飲まずにいられるなんて、幸せなことなんだよ、多分。私は（ワインなどの酒類を）飲まないが無理。

2023年7月10日（日）

学生時代からHはお酒が好きであった。しかし、ワイン1本を一人で飲み干す場面は、筆者もAも見かけなかった。14年前の筆者の結婚式に参列してくれた際にも、あまり飲まずに写真を撮ってくれていた。20代の頃、Aと筆者の3人で会った際に飲みに出かけた際にも、その時々で周囲に合わせて適量を飲むタイプであり、（今も周囲に迷惑はかけていない点は変わらないものの）深酒をすることはなかった。

次の語りは、筆者が飲酒をしなくなったと話をした際のHの様子である。

え、真沙美（筆者）お酒飲まなくなったの？（私は）毎日飲んでからでないと（仕事のことや日常の出来事を考えてしまい）眠ることができない。隕石がどっかから落ちてきたらいいのに（いろいろ面倒な人間関係とか、何もかもがフラットな状態になるから）っておもう。

2023年7月10日（日）

この言葉から、今のHに日々の飲酒は不可欠であることが伺える。そして、言葉にはしていないものの、H自身も深酒ではなく、別の「何か」で眠れるようになり、ストレスなく過ごしたいと願っているのではないだろうか。

筆者は修士課程に在籍中、教育困難校で補習授業のボランティアに参加していた。その際、困難な状況下にいる高校生が「戦争が起きてほしい」というような内容を呟くようにほそほそと話していた。高校生の述べた「戦争」とHの述べる「隕石」では、言葉のニュアンスや意味合いはやや異なるだろう。

だがしかし、世界中の誰も予想がつかない事態が起き、全員が均一に0からのスタートになることを願っている点は共通しているように感じる。一度「隕石」で全員が0からのフラットな状態になることによって、H自身で変えられない「何か」が良い方向に変わり、再スタートを切りたいと心の片隅では模索しているのではないだろうか。自分自身で変えられない状況が多いHだからこそ、出てきた言葉だと思われる。

さらに筆者が生活保護を受けるように勧めた際のHからの返答をみてみよう。

私で（生活保護を）受けれるの？だって、生活保護を受けるには、もっと本当になんていうか、受けるための（疾病とか障害等で働けない理由）資格があると思う。なんていうんだらう、まだ私は働けちゃうから。（生活保護を）もらう資格はないかなって。もちろん、（本当は働けるような状態でもずる賢く）もらってる人もいると思うんだけど。

（筆者がBと別れたら、ホームレスになっちゃうことはない？と質問する。）

寂しくて死んじゃうかも。（冗談交じりに述べている。）飛び降りとか、電車に（飛び込む）とかは、（他の人に）迷惑をかけちゃうからしないよ。

2023年7月10日（日）

現在、Hは最低賃金で働いており、状況によっては、生活保護の受給額に満たない月もあるという。しかし、生活保護の受給に際しては「もらう資格はない」と述べる。だが、筆者が「Bと別れたらどうするの？」という問いには、「寂しくて死んじゃう

かも」と矛盾することも、冗談交じりに述べている。

今のHの住居はB名義で契約している賃貸マンションであり、家賃や管理費用はBが全て支払っている。Bとの会話が最低限であるとはいえ、Bと交際し続けているから住むことが可能である。したがって、Bと別れた際には、Hは住むことができない状態に陥る。H自身でマンションやアパートを賃貸契約できるだけの資金があればよいものの、現段階ではまとまったお金が用意できていないという現実がある。次の居住先が決まるまで数か月程度泊めてくれる相手がHにいればよいが、前述した社会関係資本では難しいだろう。その際、Hは実家に依拠すること⁽¹⁴⁾を考えていると述べていた。とはいえ、Hの両親に不測の事態が起きた場合、例えば実家が丸ごとなくなるような災害等で実家に依拠できなかった際には、ホームレス状態になるか、ネットカフェ難民のような状態に近づいてしまうことが容易に想像できる。

心配した筆者が、上記の状態に陥る可能性をHに伝えた際は「すぐに（Bが）出ていけとは言わないと思うから、出ていくまでに資金を貯める。」と述べており、置かれている状態をやや楽観視している様子であった。

楽観視できる理由としては、インタビュー時に冗談とはいえ「死んじゃうかも」と述べたように、本格的ではないとしても「死」という手段で困難な状況下からの「脱出」を試みようと考えているからではないだろうか。Hにとって「死」について考えることは、ホームレスやネットカフェ難民のような困難な状況下を生きていくことよりは、しんどいことではない。むしろ、現在の生き辛さを緩和するクッション材となっているのではないだろうか。

しかし、次のインタビューでの内容では、H自身の抱える病や障害ではない「困りごと」も垣間見えてくる。

今よりも時給のいい仕事とか給料のいい仕事にもやっば惹かれるけど。でも、監視されているのが苦手。コールセンターって、録音とかされるじゃん。自分が間違っていないって、間違っていないって（上司に）言えない。1か月半くらいで無理って（なった）。でも、3か月は続けたけれど。あと、家電量販店で（3か月勤務した時も）常に（監視カメラで）監視されてるのが無理。

臨機応変って（言われているのに）臨機応変（だとHが思ったこと）をやると違うって言われるとか。臨機応変の正解（が難しい）。あとさ、真沙美（筆者）みたいに、（仕事を）辞めたいから辞めますって自分からは（なかなか）言えない。

今の仕事は誰にでもできる仕事だけれど、誰にでもできない仕事だと思う。新しく入った人（新入社員）より、10年以上勤めているパートの能力の方が高い。皆、第一希望（の会社）ではないっていうか。パートも変わった人が多いんだよね。

2023年7月10日（日）

ここでは2つの問題点が指摘されている。1つ目は、「監視」が苦手という点である。「監視」という言葉が使われているが、実際のコールセンターでの録音は、基本的に顧客からのクレームやトラブルがあった際、法的に従業員を守るためのものである。そして、家電量販店に設置されている監視カメラも従業員を監視する目的での設置ではなく、防犯目的である。

だが、いずれの場合も、録音や監視カメラの存在が、Hにとって息苦しさを感ずる要因と化している。前述したように、Hは雇用先でのハラスメントを過敏に感じとってしまう体質であり、仮にH自身がハラスメントにあってなくても、他者へのハラスメントさえもストレスに感じてしまうという繊細な一面がある。したがって、上司が従業員の誤りを指摘する目的ではなくとも、間接的に「監視」という見えない視線を上司から感じてしまう。ゆえに、常に誤りがなければ監視されているような状態に思えてしまい、ストレスを感ずるのではないだろうか。

2つ目は、給与などの非正規雇用と正規雇用による、待遇面への問題の指摘である。Hは、「新しく入った人（新入社員）より、10年以上勤めているパートの能力の方が高い。」と述べている。正規雇用で入ってきた新入社員よりも、長年勤めている非

正規雇用の従業員のほうが業務上の様々な面において優れていることも多いのだろう。だが、能力は上回る状態でありながらも、給与や待遇は正規雇用が非正規雇用を上回るという現実も同時にある。¹⁵⁾

これまで述べてきたHの身に降りかかった出来事は、東日本大震災のような大きな困難ではなく、日々の小さな困難が積み重なった結果である。どれも捉える人によっては、小さな問題だと一掃されてしまうような些細なことなのかもしれない。現にもっと頑張れとHを鼓舞する者もいるだろう。

だがしかし、他人と大事に接し、小さな嘘さえもつけない、真面目で実直なHにとっては、どれも小さな問題や些細な出来事ではないと考えることはできないだろうか。しんどい思いを多数繰り返してきたことで、社会に対する「諦め」を緩やかに持ってしまった、とは言い換えられないだろうか。しんどいことばかりの社会で生きざるを得なかった15年という歳月が、「15年間本気で笑ったことがない」という言葉となり、小さく細く漏れていた。「自分はこれくらいで幸せ」とH自らハードルを下げてしまい、明日に対して何も望まない傾向に、長い歳月をかけて少しずつ変化していったと推察される。

同じような困難な状況下において、自身での確な援助希求を周囲にできるなど、福祉や周囲からの手が届きやすい者もいるだろう。その一方で、Hのように援助希求ができない者が存在する。筆者がHを気にかけるようになった背景には、以上のようなしんどい状況があった。

（7）現在のHの状況から見えてきたこと

第一に、Hの社会関係資本が乏しいことが挙げられる。そのため、経済的のみならず、精神的にも実際相手であるBに固執し、依拠せざるを得ない状況である。第二に、外部の友人や知人からアドバイスなどのプラスの働きかけや今の生活を抜け出すための情報提供があった際にも、H自身に強いこだわりがあり、なかなかライフプランを変更できないことがわかった。H自身のこだわりを覆そうと試みることは、忍耐を必要とするだけではなく、複数の手が差し伸べられない状態では厳しい状況である。第三に、Hは「普通」でありたいと感じているにも関わらず、H自身のこだわりを優先して物事を決断し

てしまう。自身が「普通」の状況下ではない現実
気付いてはいるものの、明確な優先順位を決め
ず、人生における計画を立てることが不得手
である。その結果、年齢に相応の資産形成⁽¹⁶⁾も
できておらず、場当たり的な日々を過ごさざ
るを得ない状況に陥っている。決してHが意
図的に選んできてはいないものの、消極的
な人生⁽¹⁷⁾を歩まざるを得ない状況が見
えた。

4. 結論と考察

(1) 結論

本論文では、長年非正規雇用に従事するH
が、どのような問題を抱えており、何にこ
だわりが強いのかを検討してきた。Hの事
例から明らかになった問題として、①非
正規雇用に長らく従事した結果、以前より
見識が狭くなったことが挙げられる。②
こだわりが強く、Aや筆者など、他者から
の働きかけを拒んでしまい、H自身の決
めた枠から抜け出すことが容易ではない。
③これら①②を乗り越え、現状を抜け出
さねばならないと思わせるためには、一
友人以上に、何度も根気強くサポートし
てくれる強靱な社会関係資本や公的な支
援が不可欠である。そして、Hにとっ
て、このまま60代まで非正規雇用に
継続することで、将来不利益を被ること
、そのためにも早急に貯金等の資産形成
を始める必要があると知らせるだけで
なく、骨の髄まで訴えかけるような切
実な何か求められているだろう。

(2) 考察

以上のことから、非正規雇用に従事する
者について、どのようなことが述べられ
るだろうか。Hの事例から得られた知見
に基づき、非正規雇用に多く見られる
であろう、複雑で困難な状況下の者
に対して、どのような支援が可能となる
のか。どうすればHおよびHに近い状
況下にいる非正規雇用の彼ら／彼女ら
が社会から零れ落ちにくくなるのか。本
来の問いに立ち戻って考察したい。

第一に、社会関係資本が乏しい者が、
社会から容易に落ちこぼれる可能性が
否定できない。社会関係資本を形成す
るための何らかの教育が早期の段階で
必要である。

第二に、自分自身の枠組みに対するこ
だわりが強い

タイプは、社会だけではなく、支援から
も零れ落ちやすい存在である。加えて、
H同様に新卒時に就職活動を選ばない
者が、既卒後の支援では手遅れになっ
ている場合も多い。したがって、教育機
関に在籍している期間にこそ、高校や大
学の就職課の職員等が根気強く働きか
けることが重要ではないだろうか。

第三に、スピノヴァクの述べるように
「サバルタンは語るができない」ことが
Hのインタビューからも明らかになった。
H自身の発達障害の有無は定かではな
い。だが、障害に限らず、何らかのこ
だわりが強い者／こだわりを大切にし
すぎる者は、一定数存在するだろう。こ
だわりの度合いによっては社会関係資
本を築きにくいだけでなく、自身の困
りごとを他者に語るのが苦手な傾向が
強い。

とはいえ、どれほど社会関係資本が乏
しく、非正規雇用であったとしても、何
らかの仕事に従事している場合、周囲
に全く人がいないという状況は起こり
えない。周囲の人が困難さを察し、そ
の場で何らかのサポートを施していく
必要があるだろう。仮にHのような状
況の者が、職場を通じて福祉に繋がる
ことができれば、困難な状況を脱する
ことが可能となる。当事者が状況をう
まく語るができないからこそ、周囲に
いる者が察することが必要である。

5. 今後の課題

最後に今後の課題を述べる。

第一に、非正規雇用に未然に防ぐこと
が挙げられるだろう。しかし、望む全
ての者を正規で雇用することは現実的
ではない。したがって、非正規雇用であ
っても、正規雇用と同等の社会保障に
リーチできる環境整備が早急に望まれ
る。

第二に、本論文では触れることができ
なかつたが、高校中退や大学中退をし
た者や引きこもり等、新規学卒者に
当てはまらない層は、現在行われてい
る就職活動からは、最初から排除され
ているに等しい。とりわけ、引きこも
りやニート、中退といった層は「自己
責任」とされる傾向が強い。だが、長
期的に考えた際に、彼ら／彼女らを
早期に社会で包摂することで、労働力
の確保や生活保護費の削減にも繋がる
だろう。

第三に、高校等における金融経済教育
の重要性が

挙げられる。とはいえ、非正規雇用に従事しがちな困難な状況下の生徒が多く在籍する高校をはじめとした教育機関において、生徒や学生が「授業にはうまくのってこない／長期的なライフプランを想像できない」という危険性が考えられる。当塾においても、両親もしくは両親や兄弟のいずれかが非正規雇用に従事している場合、小中学生の生徒は将来、非正規雇用に従事することに対して必ずしも否定的な意見を持ち得ていない。非正規雇用に従事する保護者もまた、自身の子どもが非正規雇用に従事することに対して否定的ではないこともある。すなわち、一定数の生徒は予定していた授業の枠組みからはみ出してしまうことも、金融教育を施す際には危惧しなければならない。

だがしかし、将来、生徒自身が与えられた給与で生計をたてられるよう、光熱費や家賃といった必ず必要となる出費を丁寧かつ実践的に学ぶ授業⁽¹⁸⁾であれば、授業の誘いに乗りやすい可能性が示唆される。正しい経済感覚が早期に身につくことで、将来の年金未加入者を防ぐことや納税額の増額をも見込めるだろう。但し、教員の多忙化が社会問題となっている現在、教員の負担にならぬよう、外部の資源を活用する等何らかの配慮をせねばならない。

第四に、現在一部の高校において行われている「夢追い型」のキャリア教育を変えていく必要があるだろう。例えば、生徒が漠然と音楽家や声優になりたいと話した際、奨学金を借りさせてまで専門的な学校に進学することを応援するようなキャリア教育である。確かに生徒の夢を教員が応援することも誤りではない。だが、生徒の夢が叶わなかった際に、確実に非正規雇用に近づいてしまう可能性の高い職業に誘導してはいないだろうか。まずは、生徒の経済的な状況を鑑みたくて、生徒の将来に訪れるだろう様々なライフプラン、例えばアパートの賃貸契約や住宅購入等、具体的な項目を提示しながら就職活動の指導にあたっていただきたい。

第五に、就職活動に対する困りごとを抱えた筆者の卒業生が、当塾を訪ねてくることがある。とりわけヤンチャな卒業生には、高校が積極的に就職活動に加担してくれないことも少なくない。筆者と筆者の配偶者、筆者の友人らが結果的に就職活動を手伝ったこともあった。非正規雇用に働く保護者の相談事にも耳を傾ける日々でもある。だがしかし、地

域の学習塾経営者／学習塾の講師が施せることに限界があるだけではなく、そもそも筆者は学校教員ではないため、彼ら／彼女らと出会えなかった可能性の方が高い。だからこそ、困難な状況下にいる生徒／保護者と確実に出会えるであろう、学校教員・教職員にできる限り非正規雇用にしない進路指導をどうかお願いしたい。

最後に、非正規雇用の優れた面も記しておきたい。正規雇用の週5日では精神的な疾患や持病、障害等によって難しい場合であっても、非正規雇用での短時間／短期間であれば働くことが可能となる者もいる。社会保障を同等にすることが可能となれば、非正規雇用は無理のない働き方となるのではないだろうか。

〈注〉

- (1) <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/gaiyou.pdf> (2023年9月30日取得)
- (2) <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/202308sankou.pdf> (2023年9月30日取得)
- (3) <https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2022/d1/06.pdf> (2023年9月6日取得)
- (4) 筆者の大学時代の友人である。首都圏の大学で、芸術系の学科を卒業している。
- (5) Hの自宅のWi-Fiの状況から、オンラインで対面のインタビューを行うことは現実的ではなかったため、メッセージアプリを使用した。
- (6) 中川・樋口(2022)は、不安定な就労形態にある若い女性の医療アクセスは職場文化が影響していること、非正規雇用などの若年の女性に受診抑制が有意に多かったと述べる。
- (7) 首都圏の国公立大学を卒業。現在に至るまで、首都圏の飲食店で働いている。Hとは、職場である飲食店で出会う。Hとは約10年間交際・同棲している。
- (8) HとBの会話は、必要な情報のやり取りやソフト等の業務連絡が中心である。
- (9) 互いのキャンプへ行く目的は違うかもしれないが、アウトドアは、HとBの共通の趣味である。
- (10) 筆者とHの共通の友人である。首都圏の大学

を卒業後、都内で就職している。その後、地元である中部地方にUターン就職しており、結婚後の現在も中部地方に住んでいる。

- (11) 前述した友人 A
- (12) 企業側にとっては、シフトの調整がしやすく、使い勝手の良いシステムである。だが、これが不安定な雇用に繋がってしまう一因でもある。
- (13) 山本 (2022) のインタビュー調査では、「おしゃれをする」や「保険に入って将来に備える」等といった項目に対して、非正規雇用者の中には、達成できない者がいた。
- (14) H は複数ある選択肢から実家で同居することを選んでいくわけではなく、選ばざるを得ない状況で選ぶという状態である。すなわち、実家が心地よいから同居を選択する者とは大きな隔りがある。
- (15) 給与に関してのみであれば、従業員全体を通して、単工から多産工化することで、経営コスト面にも賃金の上昇分を吸収することが可能となる。(富岡 2022)
- (16) H はインタビュー内で貯金を含む資産形成に消極的であった。年齢や世代ごとの貯金の平均、また中央値に関しても気に留めていない様子であった。
- (17) H はインタビュー内で、「積極的ではなく消極的に生きている」と度々語っていた。
- (18) 認定 NPO 法人ブリッジフォースマイルでは、引越しの手続きや金銭管理、危険から身を守る術など、一人暮らしに必要な知識、スキルを伝えている。https://www.b4s.jp/activity/sudachi/ (2023 年 10 月 12 日取得)

〈引用・参考文献〉

- 伍賀一道 (2009) 「規制緩和による雇用と働き方・働かせ方の変容」, 労務理論学会誌 19 巻, pp.27-41
- 樋田敦子 (2022) 『コロナと女性の貧困 2020-2022 ~ サバイブする彼女たちの声を聞いた』, 大月書店
- 乾彰夫 (2006) 『不安定を生きる若者たち 日英比較 フリーター・ニート・失業』, 大月書店
- 片山悠樹 (2016) 『「ものづくり」と職業教育 工業

高校と仕事のつながり方』, 岩波書店

- 江天瑤 (2023) 「コロナがシングル女性の仕事と生活に与えた影響 - 川崎市における調査から -」, 人間文化創成科学論叢
- 小杉礼子・宮本みち子 (2015), 『下層化する女性たち 労働と家庭からの排除と貧困』 勁草書房
- 永濱利廣 (2022), 「コロナ禍における女性雇用の実態と課題 日本の労働市場を変える非接触化経済」, NWEC 実践研究 12 号, pp.49-63
- 中川栄利子, 樋口倫代 (2022) 「就労女性における就労形態別の労働要因および社会経済要因と受診抑制の関連」, 日本公衛誌第 69 巻第 6 号, pp.447-458
- NHK 「女性の貧困」取材班 (2014), 『女性たちの貧困 “新たな連鎖” の衝撃』, 幻冬舎
- 能町みね子 (2019), 『結婚の奴』, 平凡社
- G・C・スピノヴァク (1998) 『サバルタンは語ることができるか』 (上野忠男訳) みすず書房
- 杉田真衣 (2015) 『高卒女性の 12 年不安定な労働、ゆるやかなつながり』, 大月書店
- 鈴木紫 (2022) 「日本の労働市場における副業保有と転職希望」, 経済政策ジャーナル第 18 巻第 2 号, pp.73-95
- 富岡慎司 (2022) 「非正規雇用問題における賃金格差の同一労働同一賃金モデル」, 商学研究論集第 57 号, pp.121-140
- 山本咲子 (2022) 「ケイパビリティ・アプローチを用いた未婚女性労働者の生活の質分析 - 雇用形態別の比較 -」, 生活経済学研究, pp.45-61
- 結生, 小坂綾子 (2020) 『あっち側の彼女、こっち側の筆者 - 性的虐待、非行、そして少年院を経た -』, 朝日新聞出版

謝辞

修了後にも関わらず、見守ってくださった藤田武志先生に感謝申し上げます。また、何より今回の論文を書くにあたり、私のインタビューの申し出に貴重な時間を割いてくれた友人 H、友人 A に深く感謝しております。学生時代から、本当にありがとう。